

神戸っ子 昭和40年 1月20日第三種郵便物認可 昭和40年 3月15日印刷通巻48号 昭和40年 3月15日発行 毎月1回15日発行

郷土を愛する人々の雑誌

神戸っ子

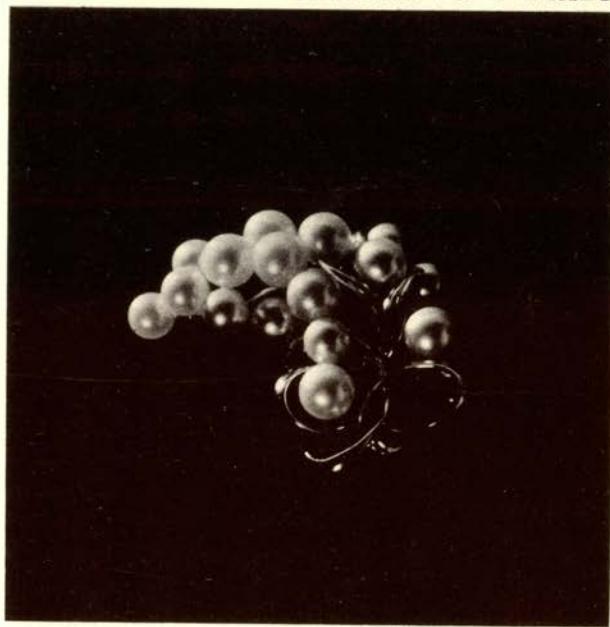
3
月号



Rikaiso

magazine kobekko march 1965 no, 48

MIKIMOTO PEARLS



優雅な宝石 ミキモトパール その永遠の輝
きは 何代にもうけつがれて愛されています
ミキモトは全世界の真珠の代名詞です

ミキモトパール  御木本真珠店

神戸店＝三ノ宮・神戸国際会館 Tel. 22-0062

大阪店＝堂島・新大ビル Tel.363-0247

これは神戸を愛する人々の手帖です

あなたのくらしに楽しい夢をおくる


神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ

これは神戸っ子の心の手帖です



65

MASARU
HARAWASHI



風 爽やか……

パールトーンの装い

タサキパール

田崎真珠

三宮店・新聞会館秀品店内
ニューポート店・ニューポートホテル内
東京・銀座店 ヒルトンホテル店
オータニホテル店 羽田：東急ホテル店
札幌・ホテル三愛店



Pearls by Tasaki

私の好きなとき

石浜みかる

(神戸女学院大学四年生)

いる。(石浜みかる)

わたしの好きな時。それは、生の喜びを感じ得る時。自分の存在が、誰かにとってなにか意味があると感じ得る時。たとえば、子供に英語を教えている時——わたしの物の捉え方をかめつく吸い取ってくれるので大好きだから、今のところ、生きていく。一瞬一瞬が好きである。

この人生は一回限り。充実した内容を盛るのに四苦八苦することだろう。それでも、生きるに値すると思つて

石浜さんは神戸女学院大学英文科4年生。昨年4月、1年間のイスラエルでの現地生活を終えて帰国。その時の体験と見聞を、最近「シャローム・イスラエル」一冊にまとめ、オリオン社より上梓した。知性と行動力を備えた、文字どおり若きホープである。

(石浜さんの自室にて)



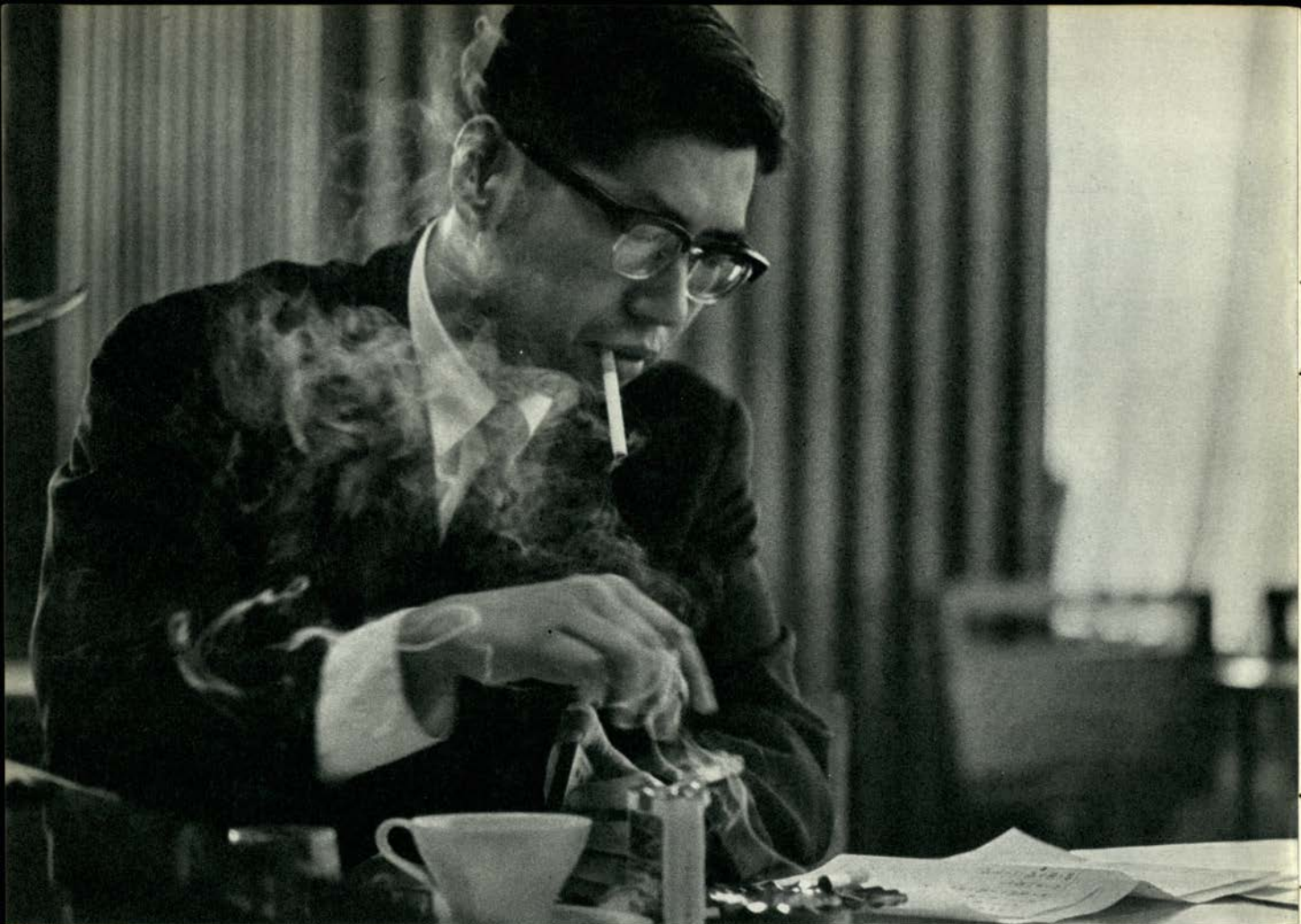
確信をもって
タジマの目が選んだ
世界の宝石の名品！



Tajima
宝飾店 **タジマ**

元町2・TEL 33-0387・2552

ダイヤモンドインルビー指輪



安水 稔和 (詩人)

撮影 / 西村雅司

この頃ここでよく見合いがある。多いときは三組四組とある。そのこちらでむつかしい顔で原稿用紙をひろげてなにやら書くのがぼくだ。ぼくは毎日、長田と青谷のあいだを往復している。だからここは中間点だ。ここへ来て、人と話したり、本を読んだり、ぼんやりものを考えたりする。人声や物音にとりかこまれて原稿用紙をひろげる。ここへ来られないときは、たいいてい日常多忙。疲れはてて、いらいらしているときだ。(安水稔和)

昨年末、5冊目の詩集「花祭」を出した安水さんは、松蔭女子高校で英語を教えている。最近には詩だけでなく、ラジオのための作品も数多く手がけ、「ニッポニアニッポン1964」は昭和39年度芸術祭参加作品としてNHKで放送された。同人雑誌「たうろす」の編集長も兼ね、このところ身辺多忙である。(国際会館エメラルドバーラーにて写す)



ダイヤデザイン指輪P m
¥ 260,000

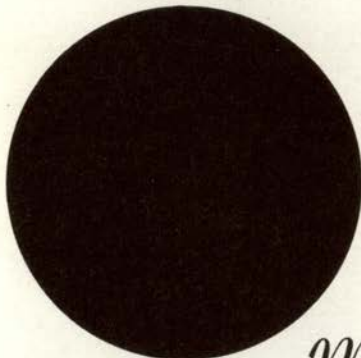


ダイヤデザインクラスP m
¥ 100,000

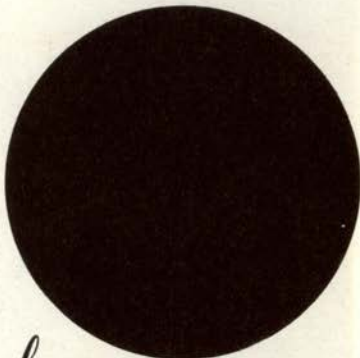


半円ペンダントK-18(クサリ別)
¥ 20,000

パリ・ニューヨークでもパールは〈ムラタ〉



南洋パールダイヤデザイン指輪P m
¥ 250,000



Murata

Pearls



ブラチナボア ¥ 35,000



真珠と毛皮
ムラタパール
ショールーム
山本通 4 23 1212



ブローチX-14 ¥ 25,000



ミュージカル特集

3月号目次

- 1 Second Cover/絵・中西 勝
- 3 グラビア/私の好きな時・撮影/西村雅司
①安水稔和 ②石浜みかる
- 9 わたしの意見/前埜秀吉
- 10 随想三題/牛にひかれる外タレたち・末広光夫
神戸弁とミュージカル・加茂さくら
ミュージカルのすすめ・和田克己
- 15 随想/ふるさと・司馬遼太郎
- 17 連載随想(2)/アパートぐらし・竹中 郁
- 19 随想/神戸15年・小島輝正
- 23 神戸っ子放談/小泉徳一
- 26 経済ポケットジャーナル
- 29 るぼるたーじゅ・コウベ⑧/海のパトロール
松原新一
- 35 オリエンタルホテル・ア・ラ・カルト(その9)
- 36 映画のこと手当り次第⑭/淀川長治
- 38 こんにちわ船長さん/⑩ホワイト クラウド号
(オーストラリア)きく人・玉奥 章
- 40 神戸の集いから/小磯良平画集出版記念会
- 43 パリ通信⑦/佐藤昭年
- 44 Mode of Kobe・福富芳美
- 46 3月の髪・西野 明
- 55 暮しのバラエティ No. 13
- 59 ミュージカル特集/対談/神戸とミュージカル
高木史郎・永 六輔
- 66 ピンクコーナー(T)
- 68 ミュージカル特集/タカラヅカミュージカル
港に浮いた青いトランクより
- 71 神戸を楽しむ私のコース⑧/原口ちから
- 72 神戸遊戯誌19/硬式テニス④・青木重雄
- 74 神戸うまいもん巡礼 No. 31・赤尾兜子
- 76 紳士入門②/記者会見紳士・竹田洋太郎
- 78 ポケットジャーナル
- 80 Kobekko Shopping Guide
- 86 連載第23回/神戸夫人・武田繁太郎
- 91 グラビア/神戸12カ月/王子動物園の夕鶴
岡部伊都子/カメラ・緒方しげを

表紙/小磯良平 撮影/米田昌弘・米田定蔵 レイアウト/橘 正三

ヒロタが誇る 世界の三大銘菓

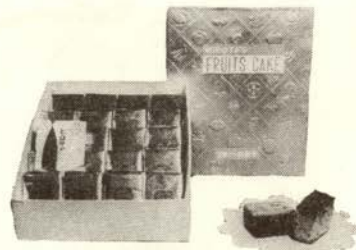
フランス

マロングラッセ



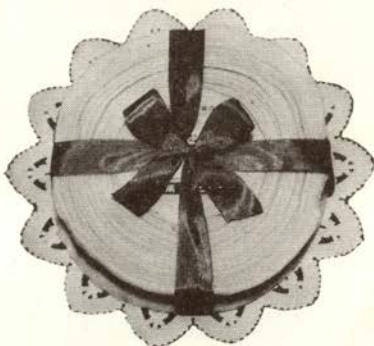
英国

フルーツケーキ



ドイツ

ピラミッド



洋菓子のヒロタ

元町店 元町3丁目 ㊦ 2340 三宮店 新聞会館秀品店 ㊦ 2312

㊦ 3523

＊わたしの意見

みんなのでつくる

三宮駅

まえの
榎 秀吉 (三宮駅長)



われわれの「三宮駅」は現在一日約十六万五千人の利用者があり、神戸駅は約九万人ほどの利用者というデータがでていて、これが現実の姿だといえます。これは神戸の中心が東へ移っていることを、はっきり物語っているわけで「三宮駅」が神戸の表玄関の役目を果たしているのです。現在の「三宮駅」で一番考えなければならぬのは駅名でしょう。神戸に来られる人たちはどうしても「神戸駅」を目標にされるらしく、利用者の方には何かと迷惑をおかけしているようです。

また、神戸の主要駅としてはスケールも設備も他の六大都市の各駅に比較すれば貧弱だといわれてもしかたがないようです。もちろん国鉄は国民の鉄道ですから、地元の見解を尊重して設備のいい、便利な駅をつくってきたいと考えています。

もつとも今度新しく建設される、交通センタービルでは国鉄も連絡路をひらき、利用者のご便宜をはかっていきます。

また、神戸でぜひ考えていただきたいことは、観光客の誘致でしょう。山あり海ありの素晴らしい神戸なのに、観光の団体客の少ないのは驚くばかり。ほとんど京都や奈良に吸収されてしまっているのは残念です。観光ルートのつくり方も検討しなければなりません。現在では旅館などの宿泊設備がないことが致命的で、団体客とくに学生、生徒の修学旅行には条件が悪くて寄りつけないといった状態です。観光にもっと力を入れなければいけないと思います。

いままでは、東海道本線の起点としてほとんどの始発をもっていた神戸も、現在「銀河」「比叡」の2本だけです。これは、利用者数が少ないためにどうしても大阪の蔭になってしまうので、このままの状態を続けていくと、まったく、ジリ貧になるおそれがあります。

やはり、神戸の皆さまに国鉄をどんどんご利用いただければ、自然に設備もよくなりますので、ぜひ可愛がってくださるようお願いいたします。

東京、横浜、大阪、京都、これは新幹線の停まる駅ではない。人口の比率からみた音楽人口の順位とみて頂きたい。悲しいかな、我等の住む神戸は四位までには顔を出さない。いいところ京都に次ぐ五位あたりに喰い込むくらいだろ

う。
外タレ（外国音楽家）がやってくる。呼び屋（公演プロモーター）は、早速、国内のスケジュールを

□随想三題□①

牛にひかれる

外タレたち

末広光夫

埋める。まず東京、大阪、京都は必ず入る。さて、それからひとしきり相談、横浜は東京に近いし、アゴ足（ホテル代、交通費）がかららないから組み入れるとしよう。神戸？ここで一寸もたつく。もし広島、九州の方のスケジュールが入れば、ついでに神戸もやるとするか。といった具合で、ほとんど大阪のエリアにまとめられる場合が多い。

それでも昨年は比較的神戸公演

の回数が多かったということは、土地柄が徐々に認識されてきたわけだろう。

ところが折角、神戸でも公演があるのに、わざわざ電車を使得て大阪の公演に出掛けていくファンも少なくない。彼らにいわせると大阪の会場が神戸に比べていいからだという。

なるほど、一理ある。でも実のところ、これはデーター不足、研究不



足である。

会場がいいから、そこに生まれてくる音楽もいいとは限らない。

軽音楽のタレントの多くは、大阪の大ホールをもてあまし、中には気持の上でいくぶんシュリンクして、普段の力量を発揮できないままに終わってしまう場合もかなりある。その点、神戸の会場は適当な広さだし、聴衆の雰囲気も暖かいと、外タレたちは口をそろえていう。そのせいか過去の事例で

は大阪公演に比べて神戸公演は毎度調子がいい。いや大阪ばかりでなく、全国各地の公演が済んでみると、神戸公演が最高であったと、呼び屋ももらすし、タレント自身も述べている。

では何故神戸では名演奏が聴けるのか。理由は、神戸公演についているプラス・アルファである。

何をかくそう、世界に名だたる神戸ステイキがそのアルファだ。この効果の素早さ、確かさは全く驚くばかり。「今晚は終わってから神戸ステイキをご馳走しよう」この一言で、どんなに旅の疲れでしおれていても、その夜は別人の如く張りきる。どんなアーティストでも人間であるのに変わりはない。そして人間は全く何んとうまいもん、に弱いことよ。でもファンにとっては一皿のステイキで生涯思い出に残る名演奏に接することができるとなれば有難い話だ。

エラ・フィッツゼラルド、トリオ・ロス・パンチョス、デューク・エリントン、ジェリー・マリガン、みんなこの口であった。

神戸の音楽ファンの皆さんよ、タレントに感謝する前に、忘れることなく但馬牛に感謝の念を持つてではないか。

（音楽プロデューサー）

いつまでも愛着をおぼえる街。大阪と違って、何んとなく異国情緒を抱かせるような霧囲気の街。それがこの神戸でしょう。そして神戸と言えば、すぐ思い出すのが「神戸弁」。

四年前、私が初めて東京・芸術座で、久保明さんと共演した「が

な錯覚をおぼえたものです。それはきつと、私の生まれが東京であったせいかも知れません。関西に居をかまえて、もう永くなりませんに今だに標準語しか駄目で、神戸弁を思うように使えないのは、私にとってはとても残念です。この「がしんたれ」では、毎日の舞台

□随想三題②

神戸弁とミュージカル

加茂さくら



しんたれ」のお芝居では「この世の中で、こんなに難しい日本の言葉があったのかしら」と痛感したものです。どちらかといえば、あまり抑揚がなく、お芝居しにくい言葉でしたので、ちょっとオーバーな表現かも知れませんが、なんだか外国の言葉を話しているよう

がそれこそ恐怖そのものでした。今、私、宝塚大劇場で公演中の高木史朗先生のミュージカル「港に浮いた青いトランク」に出演しておりますが、その稽古にはいるとき「ああ、また、四年前のあの苦しみを味わうのか」と思いながら配役発表を待ったことです。幸い

なことに、私のキャストは東京に住む香港帰りの歌手でしたので、ホッと一息、安心したことです。他の人たち、さぞセリフに悩まされて困るのではないかしらと案じていましたが、いずれも関西生まれで、揃いも揃って、普段のお芝居よりも、かえって素直に溶け込めていいとの返事、私にとっては、それこそうらやましい限りでした。

神戸の魅力を他にあげれば、外人の方々が多く住んでいる山の風景でしょう。山手にむかって坂を登ってゆくと、そこには異国の人々の生活の一端がうかがえるような感じがします。垣根越しに見えるさまざまな花壇、いかにも外国の人の住いらしい家の数々。それはまるで箱庭のような印象を与え風景画にしたいみたいです。四季のすべての点で恵まれた神戸の中でも、特に私のお気に入り、六甲山頂から一望しての神戸の夜景。この「百万弗の夜景」だけはこの地を訪れるすべての方にぜひとも見ていただきたいものです。

何かと仕事に追われて、日頃、あまり外出しない方ですが、買物だけは神戸の街へと足をはこびます。モダンなセンスに溢れた神戸のそぞろ歩きこそ女性にとって最大の楽しみなのですから。

(宝塚歌劇団雪組)

「マイ・フェア・レディ」を皮切りに「ノー・ストリングス」「ハウ・トウ・サクシード……」「アニーよ銃を取れ」「サウンド・オブ・ミュージック」。

日本の舞台は最近、片仮名ばかりである。その片仮名舞台が、これまでミュージカルという片仮名芸術に憧れる人たちが大ヒット。遂にはブロードウェイから大挙、本場の外人タレントが来日「ウェストサイド物語」の本場を再現してくれる有様。上演した日生劇場

□随想三題□③

ミュージカルの すすめ 和田克己

は連日超満員。まさにミュージカル万々歳である。ミュージカル・ファンというのもえらくふえたものである。「サウンド・オブ……」芸術座公演のロビーで、こういうファンの人たちにたくさん出会った。わざわざ神戸から高い旅費、宿泊費を払って見に来たA君もその一人である。A君、顔なじみの私を見つけてしみじみ述べた。「東京はいいですね。こうやってミュージカルがどんどん上演さ

れる。関西はあかんですなあ」なるほど流行の外国製ミュージカルにしても関西公演となると「マイ・フェア……」一本。やつと四月に芸術座がかえているせい。「キングス・アンド・アイ」を梅田コマで上演してくれるだけだが、このミュージカル・ファンは関西の、しかも神戸の親類にあたる宝塚のミュージカルを忘れている。どうも関西の人、特に神戸の人は妙な謙虚さを持ち過ぎているのではないだろうか。東京生まれ



の私をはじめ神戸へ来たとき、神戸の先輩がごちそうしてくれた夕食は、名物の神戸肉でも中華料理でもなく、何とスシであった。

同じ兵庫県の中にあり、長い伝統を持つ宝塚を自称ミュージカル・ファンは見えないのである。

そして「あれは子どもの見るものですよ」と簡単に片附ける。手近なものを、認める目がないのか何ともしないことだと思う。

大正のはじめから昭和初期にか

けて、宝塚は浅草とともにミュージカルの先駆をつとめた。古きファンたちはそれを知っていたから阪神電車の今津駅からワラジバきで歩いて通ったものである。もつともこの難行は大半が女性目当てであったらしいが、それはそれで立派なことだと思ふ。

宝塚には約五百人の女性がいる。すべてこれ独身である。私の見たところ八十パーセントまでが美人である。それなのにその客席が八十パーセントまで女性でしめられていることを知ってあせんとせざるをえない。宝塚の生徒さんの中には真剣にオムコさん探しをしている女性も多いのである。

私はA君に「もつと宝塚へ行きたまえ」とおごそかに言った。そして読者の中でミュージカル・ファンを自認する方にも宝塚行きをおすすめする。何か月もかよえば、わざわざ東京くんだりまで行かずともミュージカルの勉強は立派にできるし、第一、数少ない男性ファンとして、彼女たちの間で評価が高まるのは陽を見るより明らかだからである。

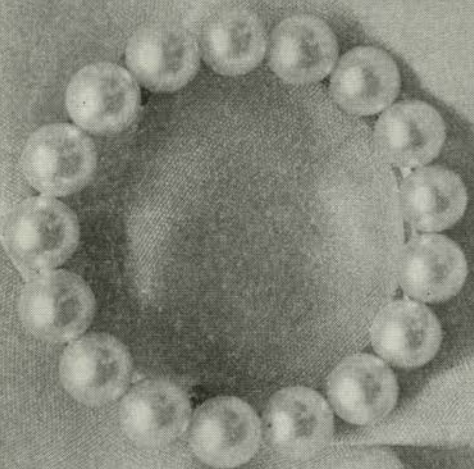
何？ お前はどうかだった？

いやそれはお聞きにならぬ方がよい。関西の女性は、認める目がないらしいからである。

(神戸新聞学芸部記者)

KITAMURA PEARLS

世界の人々に
愛される
キタムラパール



北村真珠株式会社

神戸：元町店 TEL 33 0072
オリエンタルホテル店 338111EXT.331
東京：スキヤ橋店 TEL (571) 8032

Fachreim's

ドイツ菓子

吟味された材料に
洗練された技術を
加えて“生”の持味
を十分に生かした
お菓子です。

バウムクウヘン
(ピラミッド)

ビスケット
各種ケーキ
各種詰合せ

ユ-ハイム

本店・三宮生田神社西隣
三宮店・大丸前市電筋
神戸そごう・神戸三越・神戸大丸
国際名菓・その他有名百貨店

DORMEUIL



Sportex

O-SHIBATA



柴田音吉洋服店

神戸・元町通4丁目 神戸 34-0693
大阪・高麗橋2丁目 大阪 231-2106

長寿を寿く高級洋菓子

バウムクーヘン

〈ピラミッドケーキ〉

¥150~1,600



北欧の銘菓

ユーハイム
コンフェクト



本社・工場 / 神戸熊内町一丁目(市立美術館東隣) TEL / 22-1164・9865
三宮店 / 神戸三宮生田筋(階上喫茶室) TEL / 33-7343・0156・4314
神戸 / 大丸店・阪急店・鉄道弘済会

□ 随想 □

ふるちやと

司馬 遼太郎
え・中 西 勝

「文壇酒徒番付」という印刷物が毎年「酒」という雑誌から出るのだが、それによると私は前頭の何枚目かになっている。

なぜ私が酒徒であり前頭であるかが、よくわからない。なるほど酒は多少飲むが、時あつては見さかぬもわずれて飲み、帰りの車を何度かとめてドアをひらき、開らいては吐き吐いては進発を命じ、また停車させたりするがそれは年に一度か二度ぐらいで、あとは飲んでいるのかこぼしているのか、さだかでない飲み方をする。その私の番附の上に、兵庫という二字が入っている。出身県のことである。兵庫かね、私は。と「酒」の編集部にききたいぐらいだが、毎年これを改めない。私



は口惜しいが、兵庫県出身ではない。

なぜこんなことをしたか、発想のモトは想像できる。その番附はベテランの文芸担当記者が討論の末きめるのだが（閑な話だ）、その審査員のかなに、百科事典派の哲学者のような物識りがいて、維新までは私の家は兵庫県の広播村広という在所で田を耕やしていたということを、なにかのことで記憶してくれていたせいだろう。

だから、私も多少兵庫県人ではある。兵庫県播州地方の農家の何%かが「ソノ先ハ赤松氏ヨリ出ツ」などという家系伝説をもっているように、私の家にもそういう伝説があり、中世、播州にはびこっていた赤松氏の出で、戦国期には宇野と名乗

り、徳川家には隠し姓として三木を称し（三木城築城に加わったことで）明治後、大阪に出る直前に別の姓を名乗った。

先日、サンデー毎日の編集長が交替し、新任の方が来られた。三木という人である。

「播州ですな」

と私がいうと、ええ姫路です、と三木氏がその中を驚きもせずにならずいた。驚かぬはずで、三木というのは兵庫県でもっとも多い姓の一つであり、他地方にはあまりない。哲学者の三木清や詩人の三木露風も、たしか兵庫県人であった。

つまりそれほど多い姓の三木姓が維新前の私の家の姓だったわけだから、私などれっきとした兵庫県人であるともいえる。つまり、今東光氏が、横浜で生れて函館で幼稚園に入り神戸で中等教育をうけられたくせに、おくにはどこですか、とひとに問われれば、

「津軽です」

と答えていられるように。今東光氏の御両親はどちらも津軽人で、その家は代々津軽家の家士であったことを思えば、津軽です、と答えられるのは、一種古格な響きのある正確さをもっている。その意味で私は播州人とむしろいうべきなのかもしれない。

ところが先日、大阪市立大学の直木孝次郎氏に会うことがあった。そのとき直木氏が、

「昨日、奈良で婦人会に話を頼まれて行ったのですが、そこで、あすは司馬さんに会う、と私がいうと、ああ司馬さんなら私の村のご出身です、といった婦人がいましたよ。すると司馬さんは奈良県の出身のですか」

「まあ、そのようなことでもありません」

と、私は、うれしそうに答えた。「国のまほろば」という美し大和の出身といえ、ちょっとロマンティックにきこえるではないか。

事実、奈良県北葛城郡当麻村字竹ノ内という葛城山麓の村へゆけば、私はその村の出、ということになっっているのである。なにしろ生後何カ月から三才ぐらゐまでそこに里子に行っていたのだしその後も、この村に里親の家や母親の実家があるせいで、少年時代から学生時代の最後までのだいだ、休暇といえ大阪からそこへ出かけて行って流連いつづのようなならしなさでその村で送っていた。これならば出身といわれても仕方がないし、現に私が、

「ふる里」

という語感から連想する心的風景は、つねにこの村のたたずまいであり、この村をとりまく山河なのである。それだけでなく、兵隊のころ、部下が

「小隊長はどここの出身ですか」

ときくたびに、ああ奈良県、と、さもさりげなく答える習慣をもっていた。こんりんざい、大阪だとはいわなかった。なにしろ私が赴任した連隊は戦車連隊といい、当時満州の牡丹江の東のほうに駐屯していたが、その連隊が上から下まで九州人で、九州出身の兵隊というのは大阪人に極端な偏見をもっている。「大阪や」などといえ、（また負けたか八連隊のあの大阪か）

と思ひ、もうそれこそ、私の全人格はそういう目でみられてしまい、私の一令のもとに死地にとびこむなどというような心意気をすっかりうしな

ってしまおうだろう。私は心ならずしも帝国陸軍のために奈良県人であることを偽称していたのである。

ところで私の本籍は大阪市浪速区新川一丁目だが、その土地にある難波第五小学校という出身小学校のある職員から、去年だったが、ピアノを寄附してくれというお手紙をいただいた。そういうわけてみて、なんだおれのマコトの故郷はそこだったのだな、とあらためて思い知らされるような気がして、ばかばかしくもあり、そらぞらしくもある。

り、なつかしくもあって、なにやら複雑な気持ちを味わったが、しかしピアノどころか、ピアノの脚も寄附するほどの情熱も感じなかった。

まあ、人によって多少ちがうだろうが、都会っ子うまれは大なり小なり、故郷というものを持たされていいない。ついそれを持ちたくて、私のような奇妙な多国籍意識をイメージとして持つに至っている、という半ば滑稽な、半ば悲痛な気持ちも、神戸の人ならわかっていただけだろう。

(作家)

連載随想 (2)

アパートぐらし

竹中 郁

え・中西 勝

「ひも」と大きく書いて映画館の前にいやらしい絵看板がでていた。この「ひも」は売女のうしろについているやくざの意味と受けとれた。そんな日蔭者を材料にしなくとも、もっと気持ちのいいものがどっさりあるのに、などと思いつながら私は別の「ひも」の話を思いうかべていた。そして、なんとなしに笑いがこみあげてきた。

同じ文字の「ひも」でも、こちらの方がぐんと気持ちがいい話だ。

宝塚ちかくのアパートメント。亭主の勤めている会社からおあてがいの四階建のアパートメントに住んでいる娘から、うちの妻君へ電話があつて「ひも」が足りないから送ってくれという。

一体なんだね、それは。妻が電話の内容を説明するのによると、つまりアパート生活をこちよくするために申合せた結果、ちりあくたをビニール袋に包んでくくって捨てるのだそうである。その「ひも」が足りないから、いつも有り余ってビニールのカートンにたくわえているわが家へねだってきた次第。さっそく小包みにして送ってやりますわ、という。



ビール一打入りのカートン一ぱいの「ひも」は自慢にもならないが、その半分を送ってやるにしても、小包料が要る。「おいおい、どれくらい送ってやるのかしらんが、小包料はバカにならんぞ小包料に払う金で新しいで、ひもを買う方がラチも早いし、安くつくのとちがうか」

ここで私は青砥藤綱の話をはじめた。流れの中へおとした小銭を拾うために、高い炬火の束を買って、その灯りで水中の銭をさがし当てた話で

ある。

明治時代の子どもの絵本にはこれが美談のように扱われていたので私が覚えていたのだが、今の感覚ではその反対である筈。なんてバカな奴だろう、理屈に合わんことをして何が美談だ、と唾を吐きかける。

してひもは市場へ行けば売っている。捨てるためひもには違いないが、それを金で買って使いたてたところで道徳にそむくわけではない。物の生産が乏しいころの日本なら、それは何ともったいないということになるが、今はそうではない。「市場で買わしたらどうや、小包みをつくって郵便局へ運んで、小包料を払って、それを又郵便局が車につんで、あちらの郵便局の配達が車につんで、三階のアパートまで持っていく。それのうちでも、郵便物が多くて人手の不足をかこっているのだから。」

現代の便利性は結構だと甘えてばかりいないで送ってよいものとそうでないものとを区別したらどうだ、というような口吻でいった。

「そうでんな、そうでした、電話でそういうやりますわ。」

妻は「そう、そう」づくしで合点した。

そののち、この話はどう落ちついたか聞かないたぶん、娘は新しいひもを市場で買って、まいにち出るちりあくたをくくっているのだろう。ダストシュートに放りこむときにちらりと「このひもも金がかかっているのだわ」くらい、女のことだから思っているかもしれぬ。

(詩人)